

平成 28 年 3 月 17 日

能美市議会議長

米 田 敏 勝 様

総務常任委員会委員会

委員長 北 野 哲

能美市議会総務常任委員会行政視察報告書

表題の件につき、下記の通り、ご報告いたします。

記

- 1、参加者 北野委員長、橋本副委員長、杉田委員、居村委員、山本委員、吉光総務部長
- 2、期 日 平成 28 年 1 月 25 日（月）～平成 28 年 1 月 27 日（水）
- 3、視察先 1 日目 広島県尾道市 NPO 法人空き家再生プロジェクト
法人の取り組み内容（空き家バンク制度等）について
2 日目 山口県岩国市 錦帯橋 広島県廿日市市 厳島神社
3 日目 広島県廿日市市 廿日市市役所
定住促進施策（地域支援員制度）について

1 日目 NPO 法人空き家再生プロジェクトについて

1、尾道市について

尾道は古くから港町として発展し、近代では文学・映画・坂の町として広く知られている。時代の流れによって駅前や港湾は開発され、古い歴史の面影が 失われつつあるのが現状である。その一方、車の入らない斜面地や路地裏は時代に取り残されたかのように古い家並みが未だ多く残されているが、その不便さゆえに空き家が増え続け、少子高齢化と中心市街地の空洞化の象徴となっている。

尾道の千光寺山の南斜面地だけでも 100 軒以上の空き家があるというデータがあり、空き家の中には尾道が繁栄したそれぞれの時代の象徴ともいえるお茶室のある屋敷や映画のロケにも使われた洋館までも含まれている。

2、NPO 法人空き家再生プロジェクトの取り組み

尾道らしい古いものが次々と姿を消していく現状に耐えかね、一つでもいいから残そうと、2007年5月に設立者（豊田雅子さん）が築70年の古民家を自ら購入し再生を始めたのが発端で広がり、ブログなどを介して全国から賛同者が現れ、市民・行政を巻き込んでいる。古民家再生を通して、尾道の町並みや家の歴史も掘り起こし、現代失われつつある職人の技術や尾道の景観に合ったこれからの家作りについても考え、今後のまちづくりに反映させて、将来の子供たちも誇りに思えるような尾道づくりに貢献している。

公正かつ透明性の高い運営を行い、行政や関連団体の協力を得ながら、より多くの方が参加しやすい体制を整え、なおかつ、再生物件の事業によって自立した団体を目指すために特定非営利活動法人を設立している。

3、空き家の活用事例

（1）旧和泉家別邸 通称ガウディハウス

昭和8年に和泉家の別邸として一人の大工が3年かけて建てた建物であり跡継ぎ不足と老朽化で25年間空き家の状態で解体の危機に陥っていた。2007年より尾道の斜面地における空き家再生のシンボルとして、プロセスを共有しながら再生している。再生完了後は和の空間を生かした貸しスペースや短期滞在可能な貸家として活用する。

（2）三軒家アパートメント

古いアパートのデメリットであった共有廊下などをうまく活かした方法で再生させ、10部屋それぞれ、工房（ショップ）や事務所兼ギャラリー、卓球場、カフェなど入居者自身によるDIYで自由な空間をつくり出している。

4、所見

NPO会員の約半数は、斜面地に住んでおり、空き家再生を通じて絆を深めている。空き家への引越しや改装作業を、NPO会員相互で協力するなど、「空き家」を通じたまちづくりネットワーク・コミュニティを形成している。

空き家ツアーには、兵庫や京都をはじめとして近県からも参加者があり、広域的な空き家再生のネットワークが育っている。また、卒業・修士論文のための研究に学生が訪れるなど、学術的なテーマとしても、尾道の事例が関心事となっている。

尾道市から2009年より受託している「空き家バンク」事業では、これまで23件ものマッチングを成立させている。尾道市運営時は、年2〜3件のマッチングであったというから、驚くべき数字である。また、従来ほとんど登録物件が増えていなかったが、NPOで受託してからは、年に12、13件の登録物件が増えている。問い合わせは月に50件、事務所での相談も月に20件にのぼる。このような数字は、「空き家」に関するネットワーク・コミュニ

ティが育っている。家屋の補修、改修といった空き家再生事業や各種イベント開催で、多忙なスケジュール、作業量過多で、本来ならスタッフの拡充が望まれる。しかし、今のところ会員をはじめとしたボランティアの参画によって、事業は支えられている。単に空き家を再生するだけでなく、そのプロセスを通じて、建築を学び、関わる人同士のコミュニティの確立することを重視しているからである。

活動を進めるうえでは、それぞれのアイデアや「お互いさま」の精神を大事にしている。例えば再生のイベントにおいて、職人に丸投げするのではなく、参加者が自らできる部分は行い、指導を受けながら作業できるようにするという工夫をしている。

空き家バンク事業は、従来行政が単独で行い機能していなかったものを、NPO 側から提案したのをきっかけに、2009 年 10 月から尾道市より委託を受けたものである。個人情報を取り扱う登録業務は行政が行い、NPO 側は移住者の引越しを手伝うなど細やかさを活かして家主・移住希望者の窓口業務を担うというように、行政、NPO 双方の特性を活かした協働が行われている。

3 日目 廿日市市、廿日市市役所の取り組みについて

1、廿日市市について

廿日市市は、広島県の南西部に位置し、東は広島市、西は山口県、北は島根県に接し、南は瀬戸内海に面している。海から山に至る豊かな自然、歴史と伝統、多様な産業、文化など魅力ある資源に恵まれ、日本の縮図とも言えるまちである。佐伯地域、吉和地域は、自然豊かなところで、田畑や森林がたくさんある。加えて、車で廿日市市地域から約 30 分、広島市から約 1 時間という好立地でもある。農山村地域に小さな集落が点在している。

2、移住推進の取り組み 廿日市市の現状

男女ともに 55 歳から 64 歳になる時に大幅な転入超過になっているため、退職等に伴って廿日市市に転入していることがわかる。一方で男女とも 10 歳から 24 歳なる時は大幅な転出超過となっており、女性では 25 歳から 34 歳なる時まで転出超過となっている。

これは、大学等への進学や就職のほか、結婚などに伴う転居が要因と分析している。このマーケティングをもとに対策をしたのが廿日市市シティプロモーション室である。

3、廿日市市のシティプロモーション

廿日市市では平成27年4月にシティプロモーション室を設置した。4名を配属させ、その中にはリクルート出身である民間の方を採用している。じゃらんやリクナビなどに携わっている方で廿日市市としては、ライフイベントにパートナーとして寄り添うことで、廿日市市に既に住んでいる人も今後廿日市市に移住を希望する人にとっても住み続けたいとなるまちとしての価値を創造したいと考えている。

シティプロモーションのキーワードは認知度の向上、住まい、仕事が重要で、まちの価値を高めることに重点を置いている。広島市から廿日市市までの交通アクセスの利便性をいかに向上させるかである。移住と定住では施策展開は違い、下手に補助金を出すということはない。

4、定住支援員について

廿日市市では中山間地域での移住や交流人口の拡大を図るため、定住支援員を1名配置している。また地域お越し協力隊なども活用し、空き家等の物件の掘り起こしや補助金制度を企画、定住希望地域のコミュニティへの紹介など定住実現に向けたきめ細やかな相談や助言を行っている。

5、所見

廿日市市は進学や就職などにより、若年層が減少していることに対してシティプロモーション室を設置し対策を行っている。特にマーケティングを用いて、住まいと仕事に重きを置き、いかに近隣の大都市である広島市へのアクセスを向上させるかという施策展開は能美市においても重要な施策であると思われる。能美市で言えば、金沢市や小松市といった近隣市の交通アクセスを向上させることが能美市の移住、定住促進になるのかもしれない。また廿日市市は定住を希望する人に安易に補助金を出すことはせずに、認知度の向上に力を入れていて、首都圏向けて情報発信を行っていた。能美市においても更なる首都圏に向けた情報発信の参考にすべきである。